



近代化の流れの中で、日本国内における交通手段は、鉄道から自動車へと急速に移り変わりました。しかし、有史以前からほんの数十年前まで、物流の主役の座は船でした。特に古くから都として発展した京都と、商業の中心地だった大阪を結ぶ淀川の舟運が果たした役割は、計り知れません。

世界遺産にも登録された熊野古道の起点は京都で、大阪の八軒屋船着場までは淀川の舟運が「道」として利用されていました。安土桃山時代には太閤秀吉が治水事業を行って堤や港を整備、淀川は物流の大動脈となりました。そして舟運の拠点港である伏見は、京都の玄関口として多いに繁栄しました。江戸時代には旅客船の三十石船が行き交い、明治に入って人の移動手段が鉄道に移った後も、石炭などを運ぶ貨物輸送は舟運が担っていました。

京都市伏見区三栖町、宇治川を望む河畔に開けた公園に、ひときわ大きな赤い水門があります。これが三栖閘門。近代の淀川舟運の歴史を物語る、貴重な遺産の一つです。古来洪水を繰り返した淀川では、たびたび改修工事がありましたが、特に近代的な工法が導入された明治から昭和にかけては、大規模な工事が行われるようになりました。そのうちのひとつ、1918（大正7）年から取り組まれた淀川改修増補工事では、宇治川右岸の観月橋と伏見の間に堤防が築かれ、伏見港が堤内に入りました。これにより、宇治川と濠川にある伏見港の間が船で行き来できなくなるため、合流点近くに閘門が設けられることになったのです。

土木紀行

みすこうもん

三栖閘門

きょうとふきょうとしふしみく
京都府京都市伏見区

着工は1926（大正15）年2月で、約3年の歳月と30万1241円13銭の費用をかけて1929（昭和4）年3月31日に完成。大卒初任給が約70円ぐらいの時代ですから、いかに巨費を投じた一大事業だったかが分かります。閘門の有効長は83mでそのうち閘室は73m。ここに船が入ると、塔からつり下げの形で設置された鋼鉄製の扉が電動で閉じられ、水位を調節して船を通過させる仕組みになっていました。

完成当時は1年に2万隻以上の船が利用したそうですから、まさに淀川舟運に欠かせない施設だったわけです。しかし戦後、道路整備などで陸上交通がさらに発達したことで淀川の舟運は衰退、1962（昭和37）年にはその姿を消してしまいました。さらに宇治川改修と天ヶ瀬ダムの完成によって宇治川の水位が下がったため、閘門としての役目も果たせなくなってしまいました。

舟運の歴史を物語る施設に

京都・伏見、宇治川畔の広場の一角、レトロモダンな塔と赤く塗られた鋼鉄製のゲートがよく映えます。現役を引退し老朽化していた三栖閘門は、平成15（2003）年に補修工事が完了、新たな役割を担って第二の人生を送っています。

閘門のゲートを上下するために設けられた地上16.6mの塔、そのうち宇治川側のものは機械が取り外され、階段が整備されて展望台に。かつて船を入れ水位を調節していた閘室には再び水が張られ、伏見の水郷を巡る観光船の船着場として活用

されています。また、締め切られたままの宇治川側ゲートは、そのまま堤防の一部として機能しています。

明治維新の舞台・伏見

三栖閘門のある伏見は、明治維新の舞台としても知られています。文久2（1862）年、薩摩藩の急進的な尊皇派が、関白の九条尚忠と京都所司代の酒井忠義を襲撃しようと、藩の定宿だった伏見の船宿・寺田屋に集結しました。藩主の父・島津久光は使いを送って思いとどまるよう説得しますが、急進派はこれを拒否。結局は身内である薩摩藩士の手によって討ち取られてしまいました。

慶応2（1866）年には、同じ寺田屋に宿泊していた坂本龍馬を、伏見奉行の配下が襲撃。養女のお龍が機転を利かして急を伝え、龍馬は所持したピストルで応戦、伏見の薩摩藩邸に逃げ込みました。

大政奉還の翌年・慶応4（1868）年には、幕府軍が鳥羽と伏見から京都へ進軍して新政府軍と衝突。これがのちの戊辰戦争へとつながりました。新撰組ら幕府軍が駐屯した伏見奉行所跡には石碑が立つほか、新政府軍が陣を構えた御香宮神社などもあり、その歴史を物語っています。



| | | |
|---|--|---|
| <p>【交通】</p> <p>京阪本線「中書島」下車，徒歩約10分</p> <p>【探訪コース】</p> <p>京阪の「中書島」駅を降りて南西へ進み、伏見港公園へ。そのまま園内を西へ横切ると、かつて船が行き交った濠川に突き当たります。橋を対岸へ渡ると、三栖閘門のシンボルともいえる塔が見えて</p> | <p>きます。ここ伏見は、酒どころとしても有名。中書島駅から北へ5分ほど歩くと、昔ながらの酒蔵に酒造用具などを展示した「月桂冠大蔵記念館」があります。その裏手の運河には、和船風の観光船「十石舟」に乗船できる船着き場が設けられています。十石舟の観光コースは、伏見のまちに残る運河を巡り、三栖閘門で下船。往時に思いを馳せながら、水上から土木遺産を訪ねてみてはいかがでし</p> | <p>よう。</p> <p>【特産品】</p> <p>伏見は良質な地下水に恵まれたことから酒づくりが発展。先述の「月桂冠」のほか「黄桜」などの酒造記念館もあり、きき酒をしながらお酒を選ぶことができます。情緒あふれる古き酒蔵のまちを歩きながら、お気に入りの地酒を探すのも、また探訪の楽しみです。</p> |
|---|--|---|